

書評 Review

瀬戸内海事典

橋本知佳¹

Setonaikai Encyclopedia

Chika HASHIMOTO¹

瀬戸内海事典編集委員／北川建次・関 太郎・高橋 衛・印南敏秀・佐竹 昭・町 博光・三浦正幸。
2007. 有限会社 南々社, 広島. 590p. ISBN978-4-931524-63-7. 3800 円(税別).

本書は、瀬戸内海とその周辺地域について、総合的にまとめた事典である。

瀬戸内海は、日本で最も広い内海で、波の穏やかな海岸に沿って、古くから人々の営みとともにあった。そして、その特徴的な自然環境と相まって、これまで世界に類を見ない独特の景観や文化を築き上げてきた。

穏やかな海に大小の島影が浮かぶ多島美や、白砂青松の海岸線、そしてその中で人々が日々を営み、海と共に生きるどこか懐かしい風景は、1934(昭和9)年に日本で初めての国立公園に指定されている。

また歴史的にも、有史以降、大陸と都を結ぶ大動脈としての役割を果たしてきた。船という便利な交通機関が重宝されたため、各所に港町が整備され、時代の最先端の文化や、情報が行き交う重要な地域であった。

自然環境の面でも、瀬戸内海は貴重な場所である。瀬戸や灘と呼ばれる潮の流れの速い場所、遅い場所があり、加えて島の多い複雑な海岸線が、多様な環境を生み出す。干潟や藻場のような遠浅の海が広がる一方で、突然百メートル以上も深くなる海斧かいふのような海底地形も存在している。瀬戸内海は、世界でもトップクラスの生物生産性を有しているが、このようなバラエティに富んだ豊かな環境が、それを可能にしていると言えよう。

本書は、そんな瀬戸内海の魅力を網羅し、非常に解りやすくまとめた事典である。瀬戸内海とその沿岸地域について、自然・地理、生物、環境、風景、観光、食文化、土木・建築、祭り、信仰、生活文化、言語、文学、経済・産業、歴史、交通・運輸、島など幅広い

分野に分けて、項目ごとにまとめてある。これほど包括的に瀬戸内海を扱った書籍は例が無く、瀬戸内海を知るための入門書として、ぜひお薦めしたい。また本書は、実に88名という多数の専門家によって著されている。各項目とも、分野で第一線を行く専門家が執筆を担当しているため、一つ一つの内容は非常に濃く、読み物としてもじっくり楽しめる書籍となっている。

本書は事典であり、215の項目と、44のコラムから構成されている。項目の順序は、通常の事典とは異なり、五十音順ではなく、テーマ毎にまとめて編成し、瀬戸内海の特徴を整理して理解できるように工夫されている。大枠としては、「第一編 知られざる瀬戸内海」「第二編 自然との共生」「第三編 人々の暮らし」「第四編 産業・交通」「第五編 瀬戸内海と地中海」、以上の全五編からなる。

「第一編 知られざる瀬戸内海」と「第五編 瀬戸内海と地中海」では、特に瀬戸内海の輪郭を浮き立たせるような項目が集められている。第一編では、瀬戸内海について特に意外性のある項目が集められ、特異な地域としての瀬戸内海を印象づけている。また瀬戸内海が、その名で呼ばれ始めた経緯など、基本的な事柄も紹介されている。第五編では、瀬戸内海との類似点がよく指摘される地中海を、自然や歴史、文化など、多方面について比較している。両海域での相違点を明らかにする事で、同じ内海の中でも瀬戸内海の独自性を際立たせている。

「第二編 自然との共生」では、瀬戸内海を特徴づける根底となっている、自然環境について書かれている。「第一章 自然・環境」「第二章 風景・観光」の

¹ 広島大学総合博物館；Hiroshima University Museum

二章からなり、第一章の各項目では、科学的な視点から瀬戸内海を評価している。まず瀬戸内海の形成に始まり、潮流や気候、水質や地質など瀬戸内海の自然環境についての複数の項目が、最新の知見から記述されている。また、そこに営まれる生態系についても、海域と陸域にまたがって紹介されている。さらに、その自然と人々がどのように付き合い、また利用してきたのか、人文的な見方を交えてわかりやすく概説している。第二章では、自然が織り成す景観美と、それによって発達した観光文化についてふれている。景観美については、特に日本人の近代化から現在までの景観のとりえ方の変化に軸を置いて解説されている点が興味深い。また、観光文化についても、現在を瀬戸内海観光の転換期として、これまでのスタイルと、今後、発展が期待されるスタイルについて紹介している。

「第三編 人々のくらし」は、「第一章 食す」「第二章 住む・造る」「第三章 祈る」「第四章 おんなの力」「第五章 はなす・うたう」「第六章 地名」「第七章 近・現代文学に描かれた瀬戸内海」「第八章 島を歩く」の八つの章からなる。瀬戸内海地域の人々の生活や文化について、項目ごとに成り立ちや歴史、現状が書かれている。“お好み焼き”や“世界遺産厳島神社”などの有名どころについても紹介されていて、読み込みやすい。また、第四章では、“家船”や“段々畑”など、瀬戸内海地域での厳しい生活環境を生き抜く女性たちの生き方が描かれ、第五章では地域色の強い方言の分布について紹介されるなど、人々の生活が生き生きと浮かび上がってくる内容となっている。さらに第八章で、瀬戸内海の大きな特徴である島々についても知れば、瀬戸内海地域への見方に深みが増すことはまちがいない。

「第四編 産業・交通」では、まず瀬戸内海地域で発達した産業について書かれている。第一次産業である農業や水産業については、生産物が地域の自然環境に特に深く関係しており、また工業などの第二次産業では、第一次産業に加えて地域の歴史や培われてきた伝統技術や地理的な条件も重要になってくるため、それらをふまえて、産業ごとの成り立ちや現状、今後の課題などを紹介している。また、交通については、瀬戸内海の特徴である海域交通に加えて、山陽道など陸域交通についてもその歴史を概説している。そして、陸域交通の発展に伴った海域交通の衰退が、社会に及ぼしてきた影響や、今後の課題にも言及している。

本書について、編者曰く、“待望久しい出版”だそう。1911（明治4）年に、はじめて人文・自然・社

会科学などを総合評価した『瀬戸内海論』が、小西和かなうにより著されている。当時、開国後の日本で、異文化との交流が、瀬戸内地域の本来持つ純粋な美しさを再評価し、際立たせていた。それ以来、瀬戸内海は時代とともに大きく変化しており、その背景を踏まえた本書の刊行だったのである。88名もの異分野の専門家が寄稿していることから、その期待度の大きさが伺える。

本書では、海と人とが共存する、情緒ある景観や自然環境、そして文化や歴史など、瀬戸内海の多岐にわたる魅力を伝えている。では、瀬戸内海のなにが特別なのか。本書では、全体を通して“持続可能な社会”が重要なのだと述べられている。瀬戸内海は、人々の発展と自然環境が調和した理想的な里海であったのだ。しかし、社会の変化が加速する中で、人々の発展と自然環境とのバランスが崩れてしまった。88名の筆者達の文章からは、分野は違うが、瀬戸内海の素晴らしさを大切に思う気持ちと同時に、それが失われつつある、またはすでに失われてしまったことへの危機感や無念さが伝わってくる。読者が瀬戸内海地域に関わりを持つのであれば、その素晴らしさや賞賛だけでなく、これらのマイナス面にこそ、ぜひ目を向けてもらいたい。また、瀬戸内海を知らなくとも、人々の発展と自然環境の調和について考える一例として、非常に有用である。もちろん、本書では、今後の課題についても言及している。問題は決して簡単ではないが、現状からの回復を目指した取り組みなどが紹介されている。“持続可能な社会”の大切さが叫ばれる中で、瀬戸内海を一つの例としてまとめた本書の価値は非常に高い。

上記の理由からも、本書は幅広く多くの方におすすめしたい。一見、非常に分厚く、タイトルも『瀬戸内海事典』と重たく感じ、読み切るにはかなりの気合いと労力を要するのではないかと不安に思うかも知れない。しかし、本書の特徴は、実はとても読みやすいことにある。まず目次や索引で興味のある単語を見つけ、それについて記述してある項目を読み進めてゆく、まさに事典的使い方と読むと良い。1つの項目は短く簡潔にまとめられているので、短時間で読むことが出来る。そして、文中で紹介される関連項目や、気になる単語がでてくれば、次にそれについての項目を読み進めて行けば、気付けばほとんどの項目を読んでいることになる。まずは“お好み焼き”の項目からでも読み始めれば、つぎつぎに瀬戸内海のおもしろさが見えてくる。今までなんでもなかった景色が、違う意味をもって見える楽しみを、ぜひ味わって頂きたい。